

旧約聖書に基づく教会の癒し

ウェイン・ジャンセン

序文

「教会とは何であるのか」という問いを考察する際、あるレベルにおいては我々は似たような概念を抱くであろうが、あくまでも一人一人は主観的であり、個人的な見方を持つものである。非宗教的な者にとっての「教会」は、単にキリスト教の信者が礼拝する為の建造物にすぎないという認識に留まるであろう。一般に「教会」という言葉を耳にする際に、物理的な建造物が最初に浮かぶのは当然の事であろう。近所の教会に初めて足を運んだ求道者が、出席した建物イコール教会であると結び付けてしまう事も決して不思議ではない。しかし、教会との関わりが長い者にとっての「教会とは何であるのか」という定義は上述の教会のイメージとは当然違うものである。教会はユニバーサル、エキュメニカルであり、又、物理的な建造物から全く離れた組織である。建物の役割は神を礼拝するキリスト者が礼拝を行い、リタージを高める物理的な場所を与える事であり、そこでキリスト者が聖霊にある交わりを体験できるのであれば、そこに集う者が最も美しい恵みを受ける場となる可能性があると言えるのである。

この論文において、先ず初めにキリスト教における教会の本質とは何であるのかという事を考察したい。次に、教会が抱える病とは何であるのかを明確にし、そして最後に、いかに教会に癒しがもたらされるのかという事を提案したいのである。

先ず、旧約聖書の背景に照らして、教会とはどのようなものであるべきなのかという事を考えてみたい。イスラエルの民にとって神に選ばれた民としてのアイデンティティーは不動性のあるものであった。このアイデンティティーによってイスラエルの民は破滅的な追放と因襲打破の体験を余儀なくされつつも、最終的に自分たちのアイデンティティーを守り通す事が可能となった。礼拝を行う為の神殿や幕屋を失い、周囲の民族に認められず、普通に礼拝を守る事が出来なくなった際に、彼らの選民としてのアイデンティティーがイスラエルの民を救ったと言えるのである。我々クリスチャンにとっても、自らのアイデンティティー、つまり教会に対してのイスラエルの民と同様な確信がなければ、教会は存続しない可能性が高いであろう。第二次世界大戦を振り返ってみる時、ユダヤ人の大虐殺の後残されたユダヤ人は、再度自らのユダヤ人としてのアイデンティティーを確信できたが故に世界中のユダヤ人は立ち上がる事ができた。クリスチャンの教会においても同様な精神がなければ、教会はいずれ存続しなくなってしまう懸念がある。

旧約聖書は神の民の記録であり、この民は神の家族である。ルカによる福音書の著者はイエス・キリストの系図をアダムまで遡るのである。そればかりでなく、アダムが神の子であると記す事により、アダムが我々全ての人間の父であるという事になり、そこから神様ご自身が我々の父である事をも推論できるのである。要するに、我々の先祖は、皆、神様ご自身から出た者である。ルカによる福音書の著者はこの概念を明確にする事によって新約の時代に引き継いでいる。これはイスラエルのアイデンティティーであり、キリスト者になる異邦人がこの概念を受け継がなければ、神のコミュニティーというものへの認識への理解が難しくなってしまう。イスラエルが一つの家族であるという概念は今日でも徹底しているが、その家族とは神によって選ばれた家族であり、アブラムに約束されたように、その家族を通して「地上の氏族はすべて、『イスラエル』によって祝福に入る」のである（創世記 12：3）。

今日、クリスチャンである我々はイエス・キリストを通して神の家族となり、信仰を通して神の家族としての祝福を受けている。しかし我々はイスラエルに

伝わった家族としての確信を身につけていないと言えるのではないだろうか。我々の間には教派や派閥が常に存在している。それは確かに信仰を定義する為の良い役割を担っているのである。一つの教派の存在だけであるならば、その教派の清廉を確認できなくなってしまうからである。しかし、派閥や教派は全体的な教会を第一にしなければ、教会は家族として存続できない。我々は教理の異なる解釈などを巡って議論を戦わす事もあるが、しかしそれは教会を強固にし、教会である家族を作り上げる為のものである。しかし、もし派閥の存在が家族の崩壊を意味するのならば、教会が祝福されるには程遠い。

多くのキリスト者は自己紹介の際に、所属教派や教会を名乗る事から始める。しかし、本来先立つべきものは、クリスチャンであるという認識であり、その次に続くべきものが教派なのである。ユダヤ人の間にも派閥があるが、我々はいかにユダヤ人とは異なり、又、同時にイスラエルから受け継がれたものをいかに自分たちへ継承できるのかという事をここで考えたいのである。

教会とは何か

キリスト者の間には、教会の誕生の起源に関して様々な確信がある。プロテスタント信者の中で、教会が16世紀に誕生したと主張する人は一人もいないと言えよう。しかし、今日の教会の土台は16世紀に、プロテスタント神学によって築かれたと言えよう。それ故多くのプロテスタントの信者にとって、教会の起源は400年前に遡る出来事となるのである。しかし、その当時の改革者達にはそのような意図はなかった。

北アメリカにおいて、ペンテコステの際に教会でよく言及されるフレーズは「ペンテコステが教会の誕生である」というものである。要するにこれは、聖霊降臨の出来事が、教会の誕生であるという認識に基づいているのである。五旬節の際に様々な国々から人々が集まり、聖霊によって互いに言葉が通じ合い、又、理解し合う事ができるようになった故にこの日より世界への伝道が可能になり、それ故正にこの時が教会の誕生だと考える人は多々いる (Alston, 12)。人々が参集し一つになり、頭であるイエス・キリストの体が強固になったとい

うように考えられるのではなからうか。又、イエス・キリストが12人の使徒を派遣された時こそが教会の誕生の時であるという考え方もある。

イエス・キリストを教会の創立者と認識するのであれば、イエスが世に現れる以前に教会というものは存在しなかったという認識に立ったとしても不自然ではないであろう。しかし、イエスを三位一体の永遠のひとりとして認識するのであれば、イエス・キリストは世の初めから存在していたと推論できるのである。ジャン・カルヴァンによれば、教会の起源はアダムが創造された時と一致する (Alston, 13)。「教会は数百年を通して進化してきた有機的組織体であるとカルヴァンは考えていた。アダムとエバ自身が、教会の胎児であり、その胎児は族長を通して成長し、出エジプトの時に誕生したが、その教会の父はアブラハムである。それ以来教会は人間的有機体となり、絶えず新たに生まれ変わりながら、妨害と戦いながらも目標を達成しようとするものであるとカルヴァンは考えていた」 (Alston, 13)。ルターは「聖なるキリスト教会は全ての創造物の為に、神の主なる業である」と信じていた (Alston, 12, 13)。改革派的な見方を最も明確にする文章と言え、1560年に編纂されたスコットランドの告白を挙げられよう。「アダムの創造より受肉のキリストの出現までの全時代を通して、神は教会を維持し、導き、拡大し、名誉を与え、装飾し、そして死の状態より命へ呼ばれたと我々は確信している」 (Alston, 13)。さらに、スコットランドの告白は、神はアブラハムを父の家から呼ばれ、イスラエルをファラオから保護され、約束の地を与え、イスラエルに士師達を与え、「子孫には永遠に御座につく」ダビデ王を与え、そして、「神の正しい道に彼らを召還する」為に預言者達を与えられた。イスラエルは時には滅ぼされるに値したが、神の「哀れみ」は深く、神が約束を全うする御心があった故に、メシアの出現までイスラエルを導かれたのである。改革派伝統学者ワラス・アルストン (Wallace M. Alston Jr.) は「言い換えれば、有史より教会は神の民、信者のコミュニティーである。そこから教会の物語が始まるのだ」と言及している (Alston, 14)。

故に、教会は新約聖書による産物でもなく、又、教会のルーツは1世紀に著された新約聖書の文書のみにあるのではない。むしろ、教会のルーツは旧約聖

書が編集された以前の伝承の時代に遡る。教会の起源は神学のビッグバンとも言える「光あれ」という神の最初の命令に遡り、それ以来教会が存在している訳である。その時に、神は無意味で、役立たない、暗い混沌たる深淵を、父としてご自分が個人的な関係をもつような世界へと変貌させたのである。我々は三位一体の神を告白するが、三位一体のひとりとして、イエス・キリストは父と聖霊と共におられ、宇宙を変容した光を見、そして、時が満ちた際、希望を滅ぼす邪惡な窮地から人間を救う為にキリストが世に送られたのである。

言うまでもなく、使徒パウロの文書は全て旧約聖書の神学を土台として書かれている。そして、キリスト教の主なる教義が新約聖書に基づいているという事は事実であっても、我々と神の間との関係を明確にしようとする際には、教会改革者達は旧約聖書に言及したのである。イエスが父なる神との関係について教えられた際にも、その神学は旧約聖書のそれぞれのイメージから成り立っていると考えられる。例えば、荒野の誘惑における悪魔との対話は全て旧約聖書の引用に基づいている（マタイ 4：1-10；ルカ 4：1-12）。イエスが悪魔に語った事はイエスの宗教的なアイデンティティーの土台であったのである。イエスがそのアイデンティティーを我々に継承させるという事はメシアの役割の一つであったと考えられるであろう。

偉大な改革者ジャン・カルヴァンは旧約聖書を重んじ、旧約聖書を新約聖書の単なる前兆としてではなく、両者が完全な連続性のある文章の集積である事を認めていた。アブラハムと教会の関係についてカルヴァンは以下のように記している。

信仰に関して、我々はアブラハムを 10 万人の 1 人と等しいと思わざるを得ない。アブラハムが信仰を持つ者の最大の模範となった故に、神の子になる為に我々はアブラハムの家族の一員である事を認めざるを得ない。アブラハムは信仰者の全ての父であるので、教会の最も奥の角にすらアブラハムが存在しないと断言する事程道理に反したものはないであろう。それ故、アブラハムを教会から追放するならば、いや、最も高い名誉のある位から追放する

ような事があるならば、教会は完全に絶滅してしまう事になるのである (Institutes, 2. 10. 11)。

つまり、アブラハムが永遠なる教会の一員である事を認める為には、その数百年後に出現する事になったキリストを実際に知る必要がなかったのは当然であるとカルヴァンは主張しているのである。上記より、アブラハムの存在がなかったのであれば、教会の存在もなかったと結論づけられる。カルヴァンの理解によると、イエス・キリストの教会が存在しているという事は、アブラハムがその教会の偉大な一員である事自体を意味するのである。アブラハムを教会から除外するならば、教会そのものが存在しないのだとカルヴァンは示唆している。アブラハムが史的イエスを知らず、神であり人間であるメシアとしての神の出現を知らなかったとしても、イエス・キリストは永遠の三位一体の神を知った故に、アブラハムが主なる神を知る事によってキリストを知ったと言える。従って、アブラハムとアダムは、意識的に神の子なるイエス・キリスト御自身を信じる事すら出来なかったとしても、主なる神への信仰によりイエス・キリストをも信じた事になるのである。それは、父と子と聖霊とが分けられない一体であるが故に主なる神を信じる事によってキリストへの信仰へと結びつくのである。

現代の教会は光を照らしているのか

先ず、イエス・キリストを形成した神学と人間学は現代の教会には根付いていないのではないかと提唱したい。使徒信条において我々は三位一体の神——父、子、聖霊をひとりの神として信ずると告白するのである。教会の頭である御子は三位一体の他のものから切り離せないと同様に、頭であるキリストとその教会である体を分離する事は出来ない。頭であるキリストと体とは一体である故、キリストを三位一体の神から切り離してしまうと神の本質がなくなってしまうのと同様に、その頭から体を離してしまうのであれば、教会の本質も消失してしまうのである。

イスラエルの民は、体と魂とは一体であると信じていた (*Holman Bible Dictionary*, 61)。人は体と霊で成り立ち、そのどちらかが欠けても、人として成り立たないと信じられていた。我々はギリシャ人の影響を受け、体と魂とが別なものであるように考える傾向がある。しかし、カール・バルトは体と魂とが別々なものであるという理論に反対の立場を示し、両者は相互依存しており、切り離す事が出来ないというのがバルトの人間論である (Price, 245-264)。

教会は世にあるものである。ユダヤ人にとって神の選民としてのアイデンティティーはイスラエルの救いのみを意図するものではなかったのである。むしろ、世界の全ての民が主を知り、礼拝するようになる為に神はイスラエルの民を遣わされたのであった (創世記 12:1-3)。つまり、イスラエルは世界の全ての人々に繋がっていた。神が彼らを選ばれた理由はたった一つの民を救う為ではなく、世界を救う事にあった。言い換えれば、イスラエルを世の他の民から完全に切り離す事は出来なかったのである。イスラエルは、他の民が主を拝むようになる為の神の「使者」としての役割を担っていたのである。神に選ばれた者として、世を照らし、「国々は『イスラエル』を照らす光に向かい、王たちは射し出ずるその輝きに向かって歩む」事になると預言者は語っている (イザヤ書 60:3, 4)。つまり、イスラエルは他の国々の為に存在しているという召命があった訳である。様々な民と戦いながらも、最終的にはそのような民がイスラエルの礼拝する主なる神のもとに来る事が目標であったのである。他の民がイスラエルに照らされ、神を畏れるようになるのであれば、イスラエルは最大の祝福を受ける事になるのである。

イスラエルが世を照らす光であったように、我々も同様に世の光となくなてはならない。キリスト者の召命は下記の文章に記されている。

神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを

果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。(コリントの信徒への手紙二 5:19)

キリスト者としての我々の召命は「キリストの使者」として生きる事、又、世の人々をキリストの御もとに招く事である。そして、我々が神と和解する事は、我々の為のみだけではなく、世の他の人々の為でもある。従って、世の人々が我々を通してキリストのもとに招かれ、我々と共にキリストを拝むようになる時に、我々は最大の恵みを受ける事になるのである。

教会の会員数が減りつつある現在では、教会が一般社会のニーズを満たす教会を提供していないのではないだろうか。「教会は私に合わない」、「教会は私のニーズに対応していない」というコメントをカウンセラーの立場として耳にする。教会の礼拝や形式、又は説教に関して不満を唱える人は少数である。むしろ教会が自分を認めてくれないという不満はよく耳にする。つまり、教会は最初は歓迎してくれるが、真に自分の事を知ろうとはしていない、自分に耳を傾けようとしなないという事実は最も深刻な問題であるのではないかと思う。未信者の声に耳を傾けようとしなないという事は教会の抱えている課題の一つではなかろうか。

数年前私はCS教師の修養会に出席した際、キリスト教高等学校の教師や、教師と共に出席していた生徒の何人かの話を聞く機会が与えられた。生徒達は正直に胸の内を語り、キリスト教や教会のプラスとマイナスの点に関して彼らなりの率直な意見を述べてくれた。生徒の話の後、私は彼らの率直な意見に感謝し、我々教師は、キリスト教に対しての生徒や若者の感想にもっと耳を傾ける必要がある事をコメントした。私の感想の後に、あるベテランの牧師が意見を述べた。その主旨は、教会の牧師として、自らは教会の外にいる人達の話聞く必要はないという事。又、信徒は教会であり、信徒は正しい福音を継承している。新たな教会員になりたいと望む者は、教会の慣行に従わなければならないのだというようなものであった。

教義的な立場から考えると、この牧師の発言には確かに真実が含まれている

と言えよう。教会のリーダーたる者は正しい教義を教える責任を負っているのである。教会の教えを信じられないのであれば、教会はそのような人に合わせる必要はない。人に迎合しようとする教会は頭であるキリストから離れ、教会ではないものになってしまう。しかし、人間学的な立場から考えると、教会は社会の声に耳を傾ける責任があり、そして教会を聖霊が導こうとなさっている道に従う責任があるのである。イエス・キリストはユダヤ教の聖職者の目に自分がどのように映っているのかという事を憂慮せず、常に周りの者の話に耳を傾けていた（マタイによる福音書9:10）。罪人として裁かれた者の霊的救いの為にイエス・キリストはユダヤ教を改革する必要がある事を認識していたのである。

カール・バルトは我々が人に耳を傾ける必要性を厳しく説いている。バルトによれば、他人に耳を傾けようとしない姿勢は自らの人間性を否定する事に等しいというのである。二人の者が話しているからと言って、互いに聞いているという事は確認されない。「人を見落とす事が出来ると同様に、聞き落とす事も出来る……対話というものは二つの独白から成り立たない」とバルトは言う（Price, 149）。しかしながら他人に耳を傾ける事によって我々は自らを失っている訳ではなく、むしろ相手を聞く事によって自分を認めているのだとバルトは言うのである。教会も世の中との対話を持たなければならない。世の人々の声を聞く事によって教会は本質を失う事はなく、むしろ耳を傾ける事によって教会は自らの本質に関して、新しくより深い理解を得られるようになるのである。教会は確かに一般社会から離れたものではあるが、社会との関わりをもつ事が教会の使命なのである。社会から離れてしまうと、教会は内的になり、世を照らす光でなくなってしまう恐れがある。

神の家族である教会はいかに癒されるのか

教会はいわば家族のようなものである。神が地上の家族の全ての父である故に、我々は、皆、一つの家族である（エフェソの信徒への手紙3:14, 15）。我々の周りには様々な家族が存在する。健全な家族もあれば、治療が困難な機能

障害を負った家族もある。しかし完全な家族と言えるものなど一つもない。ある意味で全ての家族はある程度の機能障害をもっているのである。同様に全ての教会は完全な教会であるとは言えない。全ての教会はある程度の機能障害を負っているのである。一般の家族と同様に罪人で成り立っている教会が障害をもっていても不思議ではない。しかし、その機能障害が重すぎると、教会は教会としての使命を果たせなくなってしまうのである。その場合、機能障害を持つ家族のように、外見上は健康であるように見えても、内を観察すると深刻な問題が存在するのである。重い機能障害を持つ家族が成長できないと同様に、重い機能障害を持つ教会も発展を妨げられ、世を照らす事も出来ない。このような教会を癒す必要があるとき、いかに癒しが始められるのだろうか。

イスラエルが 12 氏族で成り立ったように、教会の教派や伝統は様々であり、教会の中にも「氏族」のようなものが存在する。そのような状況にあってイスラエルは一つであるという概念は教会にも必要となっている。ここでイスラエルという国の癒しを考える事によって教会の癒しを考えていただきたい。その為に、士師記の記述を考えながら、イスラエルの物語がどのように現代の教会の物語と繋がっているかについて考えてみたい。

指導者ヨシュアの死後、「誰が最初に上って行って、カナン人を攻撃すべきでしょうか」という問いによって士師記の時代が始まる。一人の強力な指導者を失った際、イスラエルの全ての民がそれぞれの将来を考えざるを得なかった。「主は、『ユダが上れ。見よ、わたしはその地をユダの手に渡す』と言われた」。そして、「ユダは兄弟シメオンに、『わたしに割り当てられた領土と一緒に上って、カナン人と戦ってください。あなたに割り当てられた領土にあなたが行かれるとき、わたしも一緒に行きます』」と言った。シメオンはユダに同行することにした（士師記 1：1-3）。

イスラエルの 12 氏族にはそれぞれの伝統や特色があったと想像される。ユダは積極的な氏族であった故に、主なる神はカナン人の攻撃の為にユダを選んだ。シメオンという氏族は無名の氏族で、最終的にユダ族に入ったのである（ヨシュア記 19：9）。

シメオン族が自らのアイデンティティーを捨てた故に苦しんだと考える人はいるかも知れないが、シメオンは自分の意志で決断したのである。シメオンは己の事を考えるだけでなく、イスラエル全体の事を考える事によって、ユダと共にカナン人を攻撃する事になった（士師記 1:3）。後にユダ族の中にシメオンの子孫が存在していったのであるが、それはイスラエルを守る為にユダ族に荷担する方が良いと判断したからである。

数年前に「A教会」の会員数が数十人までに減少し、教会の総会で今後の展望についての議論がなされた。A教会には、長い歴史と伝統があり、福音を伝えながら近隣の為に良い奉仕をしてきた。しかし教会には高齢者しか残っていなかった故に、何らかの対策をとらざるを得ないと決断を迫られた。結論として、総会の決議でA教会を解散し、残された教会員は周辺教会に出席するようになった。しかしだからと言って、元A教会の会員がいなくなった訳ではなく、他教会での奉仕を通じて、自分たちの賜物をキリストの教会の為に用い続けているのである。

このケースとは対照的に同教派である「B教会」と「C教会」の話がある。A教会同様、B教会とC教会の教会員数が大幅に減少した。しかし解散する話も合併する話もなく、両教会は自らの伝統を守る為に会堂建築を始めた。両教会はそのままそれぞれの伝統を守っているのだが、キリストの教会全体の事が考えられるのかという事は問われていないのではないかと思われる。

士師記の終わりで、ベニヤミン族のギブアという町民が大きな罪を犯した為、イスラエルの他の氏族はベニヤミン族を攻撃し、その戦いの後、ベニヤミン族の生存者はわずか 600 人の男だけとなった。ベニヤミン族は罰を受けるに値したので、神の命令に従い攻撃されたのである（士師記 20:23）。しかし、ベニヤミン族の一つが絶滅しそうになった時、他の氏族の人々は「声をあげて泣き叫んだ。『イスラエルの神、主よ。なぜイスラエルにこのようなことが行われ、今日イスラエルから一つの部族が欠けることになったのですか』』というように不安に陥った（士師記 21:2, 3）。その不安は、イスラエルの民が 12 氏族で成り立っている事実起因するものであった。一つの氏族が欠けると、イスラエ

ルという民も消滅するのである。要するに、12 氏族から構成されていないイスラエルというものは考えられなかったのである。ベニヤミン族は確かに重い罪を犯したが、彼らはイスラエルの他の氏族の「兄弟」であった故に、イスラエルという家族の大切なメンバーの 1 族でもあった。それ故、イスラエルの人々は残存した 600 人の男達をどうにかして救わなければならないと思い至った。ベニヤミンに対して怒りを持った為に、イスラエルは「我々はだれも自分の娘をベニヤミンに嫁として与えないことにする」と誓った故に、それを破る事が出来なかった（士師記 21:1）。しかし、その誓いの際に居合わせなかった者達の娘達が与えられた。このようにしてベニヤミン族は存続し、1 族が不足してしまう不安故にイスラエルも祝福を受ける事になった。

キリストの教会には、様々なグループが存在し、時には他のグループが、我々の敵になる事もある。しかし、他のグループも教会という家族の氏族である。時として罰を与える必要性も生じるが、消滅を求める事は望ましくない。イスラエルにとって、ベニヤミン族は望ましくない氏族であったが、ベニヤミン族を救った事によりイスラエルは癒されたと言える。

イスラエルはベニヤミン族と戦った。我々も他のグループと戦う事がある。しかし最終的に必要なのは、和解と理解である。そうでなければ、ベニヤミン族の欠けたイスラエルが不完全であったと同様に、特定の集団を教会から追い払う事も不完全な教会を築く事になる。ベニヤミン族がイスラエルに必要な 1 族であったように、我々にとっても、他の教派や、異なる神学を掲げる派が必要である。我々は全ての者の賜物を認めざるを得ないのである。このような姿勢によって教会が癒され、キリストの体も健全となるのである。

結び

この論文において、旧約聖書の歴史と物語に照らして、教会の本質とは何であるのかというテーマを明確にしようとした。次に、教会の課題の一つは教会が内的になってしまうが故に、世を照らす事が困難になっている現状を提示した。そして最後に、士師記を模範として、現代の教会はどのように癒されるの

かという事を考察した。ウェスタン神学大学院における旧約聖書学博士であるトーマス・A. ボーガルト (Thomas A. Boogaart) は内科の待合室で実際に行われた会話のエピソードについてこのように記している。ある人が彼の仕事について尋ねてきたので「旧約聖書を教えている」と答えると、その相手は「あー、それは残念ですね」というように呟いたのであった。このような反応は宗教改革者達の場合と全く異なるとボーガルトは主張している。更に現代の人人は、旧約聖書は人生において不適切なものであると言う (Boogaart, Autumn 2000, p.5)。

D. H. ローレンス (D. H. Lawrence) を引用し、ボーガルトは聖書を読む大切さを改めて力説している。

この世の中には様々な書物は存在しているが、小説より高級なものはないと言うのである。神学者、科学者、哲学者、詩人から出るものはそれぞれ素晴らしいが、小説のように人生の全ての面に触れる事は出来ない。そして、小説の源であるものは複雑であり、偉大な聖書であるとD. H. ローレンスは言う (Boogaart, Winter 1999-2000, p.130)。

この論文においてボーガルトは旧約聖書を味わう必要性を力説している。

ラビ・クシュナー (Harold S. Kushner) は 1996 年のドキュメンタリーで、マルティン・ブーバーの思想を説き、「神は神学を重んじるのではなく、宗教を大切にするのである」と言った。ブーバーは、人間は神学を語りすぎて、宗教が足りないと考えたのである (Kushner, 1996)。この発言は、神学は宗教より低いレベルにあるものであると結論づけているのでは決してない。むしろ、現代の世界において人々は霊的に不健康になっているとクシュナーは言いたいのではないだろうか。神学は我々を区分化する事もあり、我々を阻害する可能性もある。しかし、宗教は我々を一つにまとめ、異なる者同士を礼拝を通して祝福するのである。旧約聖書に基づく神学と宗教の絶妙なバランスは、様々な労苦を受けていたイスラエルを霊的に支えていたのである。現代の教会のリーダー達の課

題は、教会において旧約聖書を通していかに教会を癒せるのかというものであるのではなかろうか。

(Wayne Jansen)

文 献

- Alston, Wallace M. Jr., *Guides to the Reformed Tradition: The Church.*, Atlanta: John Knox Press, 1984.
- Boogaart, Thomas, 1999-2000. Elisha's Prayer: O Lord, Open Their Eyes. *Reformed Review* Vol. 53 No. 2:128-143.
- _____, 2000. Israel's Experience of the Spirit. *Reformed Review* Vol.54 No.1:5-22.
- Calvin's Institutes, *The John Calvin Collection*. [CD-ROM] (Ages Software, Inc., 2000)
- Holman Bible Dictionary*, Nashville: Holman Bible Publishers, 1991.
- Kushner, Harold S. interviewed in *Searching for God in America*. [Cassette Recording] (Community Television of Southern California and Trilinnium Productions) Dallas: Word Publishing, 1996.
- Price, Daniel J., *Karl Barth's Anthropology in Light of Modern Thought*. Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Co., 2002.